

『坂の上の雲』

文春文庫刊
著者：司馬遼太郎
全8巻



ご存知のようにNHK大河ドラマで四年間かけて映像化が進められている原作である。「軍人をドラマにしてけしからん。」という向きもあるそうだが、過去の戦争を美化する意図はなく、読めばむしろその逆であることがお分かり頂けると思う。じつは大学院生のころ、研究の進め方というか研究そのものが分からなくて悶々としていたころにこれを読み、研究に開眼したという経緯がある。私がお薦めしたい一冊なのである。

坂の上の雲は、日本が西洋文明を取り入れて新しい国を創ろうとした明治初期の明るい雰囲気の中、秋山好古、真之兄弟と正岡子規を主人公に描いている。前半の部分は、星新一の「明治・父・アメリカ」に描かれた風景とも重なる場面も多い。その明るさが日清戦争を経て日露戦争に至るくだりの重々しさと対照的であり、平時のありがたさが胸にしみる。司馬氏は、日露戦争をバノラマ図のように描くために主人公以外の人物像を事細かに書いてゆく。そして児玉源太郎、東郷平八郎、乃木希典その他の各戦場で中心的な役割を果たした将兵、下士官など夥しい人間群像が登場する。

司馬遼太郎は、この小説の中で自分自身の太平洋戦争末期の体験を呼び起こし、なぜあのような馬鹿げた戦争をしてしまったのかという疑問を、この明治の戦争に照らしながら繰り返す。また指揮を任された人間の視野の狭さ、想像力の乏しさも詳細に描いてゆく。日露戦争は過去の戦争であるかもしれないが、ここに描かれる人間群像は、現在の日本人群像のままかもしれない。ビジョンなきリーダーの下での兵卒たちは悲惨である。という点において、この小説は、研究を指揮する者が負うべき責任みたいなものを私に教えてくれた。多忙の中で、つい院生任せになりがちなとき、この小説を思い出し自ら戒めることにしている。

学生スタッフ コラム 7



あなたにとって、これまでの一番の夏の思い出はなんですか。私のそれは小学生時代の思い出です。大事な思い出を胸に抱えて、私は今年20歳を迎えます！

先日、私は何を思ったか母校の小学校に立ち寄った。数年ぶりに母校を訪れて私が一番の方向かった先は、プールの裏手であった。

小学六年生の夏のことだ。ある友人が、校内プールの地下へと潜れる場所を見つけてきた。プールは背の高いフェンスに囲まれていたのだが、それを越えた先に地下へと繋がる穴があるらしい。プールの裏手のフェンスはぐらぐらしており、そこを上げてできた隙間から私達はいとも簡単にプールの地下へと潜れたのである。とは言っても、そこは小学生が屈み込んでやっと入れるくらい狭い場所だ。おまけに薄暗かったのを覚えていた。しかしそれが「秘密基地らしさ」を演出し、私達は毎日昼休憩になるとそこへ足繁く通い続けたという訳だ。

そんな小学生時代の夏の思い出があったプールは裏手へ入って行ってみると、そこには補修されたフェンスが立ち並んでいた。「秘密基地」への侵入を容易にしていたあのフェンスは撤去され、頑丈なものへと生まれ変わったのだ。「もう帰ることは出来ない」。そう痛感した瞬間だった。「秘密基地」にも、毎日昼休憩になると胸を躍らせていたあの頃の自分にも――。

私は今年20歳を迎える。またまた未熟ではあるが、小学生の自分よりは成長し

たと思う。しかしそれと同時に、なにか大事なものを小学校に置いてきた気がする。小学生特有の純粋無垢な気持ちで机に向かい、グラウンドを駆け回り、いたずらをしたあの場所が、あの時間が、あの自分が、なんだか遠く感じられた。

「自分の中から姿を消した無垢な気持ちを取り戻したい」。そんな無意識な感情が、あの日私を小学校に連れて行ったのかもしれない。しかしそこに行っても、そういった気持ちはまったく取り戻せなかった。目の前に立ちはだかる真新しいフェンスがそれを拒んだのだ。まるで私を諭すように。「違う、ここじゃない」と。無垢なものへの憧憬を無理矢理拭い去る必要はないが、それにしがみついているのは駄目な気がする。純粋な気持ちで何かを追い続けるのは素敵かもしれないが、色んなことが分かり始めるとそうはいかない。他人の汚らわしさも、社会の汚らわしさも、そして自分の汚らわしさも全部認めて、真正面から受け止めなければならぬ時がある。もしかすると、そうすることが大人になるといことなのかもしれない。

私も、「秘密基地」で語り合った同級生達も、今年こうして「大人」になる。酸いも甘いも経験しながら、そして、さまざまな汚らわしさと向き合いながら。

(学生広報スタッフ 中桐 康介)

より良い広報誌を作成するために、みなさまからのご意見・ご要望をお待ちしております。取り上げてほしい話題、質問したいことなど、何でも結構ですので、右記連絡先までお寄せください。

岡山大学広報誌



第57号
2010.8

発行/岡山大学学長戦略室

〒700-8530 岡山市北区津島中1-1-1
TEL. (086) 251-7292 FAX. (086) 251-7294
E-mail. www-adm@adm.okayama-u.ac.jp

<http://www.okayama-u.ac.jp>

